

## 7. はたらくー生産・生業ー

菊地暁 folklore.lecture@gmail.com

### 1. 「はたらく」ということ

- ・生産 (production) 人間が自然に働きかけて、自然から財貨・使用価値を獲得する行為
- ・生業 (subsistence) 生計を維持するために行われる仕事
- ・分類 正／副業、頭脳／肉体、熟練／非熟練、専門的／非専門的…  
第一次産業 (農林水産業) / 第二次産業 (鉱工業) / 第三次産業 (サービス業)  
狩猟採集→農業牧畜→機械工業→情報産業
- ・ポイント ①対象 ②社会関係 ③労働技能→「はたらく」のカタチ

### 2. 「はたらく」ケーススタディ

- ・ある皿洗い：全国屈指のマンモス学食／巨大洗浄機／五人の「ライト・スタッフ」
- ・技能の獲得：動作のエコノミー／周囲の教育的配慮／実践者のカスタマイズ
- ・技能の革新：イノベーションの要因／人的構成の変化／「遊び」の効用と昂揚
- ・技能はどこにあるのか
  - ①ヒトという契機：M・モースの「身体技法」「威光模倣」
  - ②コトバという契機：生田久美子の「わざ言語」
  - ③環境という契機：レイヴ&ウエンガーの「実践共同体」

技能＝実践者の身体が人的・物的環境にシンクロして成立する状況的・文脈的・相互作用

### 3. 「はたらく」の近代／現在

- ・資本主義 (capitalism)：「差異」により「利潤」を産み出す体制
- ・グローバル化 (globalization)：交通・通信技術の発達にともなう空間と時間の圧縮
- ・労働市場の自由化：日本的雇用 (終身雇用、年功序列、会社別組合…) の終焉
- ・「総中流」＝「がんばればなんとかなる」社会の終焉→構造改革の過渡的状態の諸問題
- ・ブラックに抗するために：「やりたいこと」「できること」「求められていること」

#### [文献]

M・モース 1976 「身体技法」『社会学と人類学Ⅱ』弘文堂

生田久美子 1987 『「わざ」から知る』東京大学出版会

J・レイヴ&E・ウエンガー 1993 『状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加』産業図書

福島真人編 1995 『身体の構築学 社会的学習過程としての身体技法』ひつじ書房

岩井克人 2003 『会社はこれからどうなるのか』平凡社

菊地暁編 2005 『身体論のすすめ』丸善

今野晴貴 2012 『ブラック企業 日本を食いつぶす妖怪』文春新書

M・モース「身体技法」

「わたくしがあえて身体技法 [technique du corps] と称するのは、もろもろも身体技法の研究、解説、純粹簡明な記述を起点として、身体技法一般の理論を構成することができるからである。わたくしはこの言葉をもって人間がそれぞれの社会で伝統的な態様でその身体を用いる仕方と解している」(P121)

「以上の諸条件を考慮すると、われわれの問題は身体技法にある、と端的に言わねばならない。身体こそは、人間の不可欠の、また、もっとも本来的な道具である。あるいは、もっと正確に言えば、身体こそは、道具とまでは言わなくとも、人間の欠くべからざる、しかももっとも本来的な技法対象であり、また同時に技法手段でもある」(P132-133)

